

「新年、おめでとうございます」

2021年01月01日

新年、おめでとうございます。

この年の、あなたの歩みの上に主イエスの恵みと祝福をお祈りいたします。今年もよろしく願いいたします。

「神の約束はすべて、この方において、『然り』となったからです。それで、私たちはこの方を通して神に『アーメン』と唱え、栄光を帰するのです。」

(コリントの信徒への手紙 二 1章 20節)

昨年来、コロナ禍に襲われ、振り回されています。しかし、キリストにおいて、すべて「然り」が宣言されていることを覚え、希望を抱いています。退院して、2年になります。学術会議の会員任命拒否は菅政権の強権性を露わにしました。学問の自由、信教の自由が人間の尊厳を保障します。しっかり守りましょう。(隆雄)

スマホによる交流、数独、早朝ウォーキングで夜明けの空を楽しみながら、健康を願っています。(悦子)

2021年 元旦

秋 吉 隆 雄・悦子

私たち夫婦の年賀状である。昨年は、嬉しいことが少なかった。コロナ禍のニュースに気が滅入った。新型コロナは世界中を襲い、日本においても連日、過去最高の感染者数が報道され、感染した人たちの苦悩と医療関係者たちの苦労に心が痛む。私も感染しないように、人との関りを避け、手洗いとうがいを励行しているが、知人に感染者が出ていると聞いて、他人ごとではなくなった。ワクチンが開発され、早い終息を願う。

安倍晋三前首相の「桜」夕食会費の補填発言に関する偽証問題は、秘書の独断で、安部前首相は不起訴で終わるらしい。秘書に騙されたという言い分のようなのだが、誰が納得するだろうか。交替したばかりの菅義偉首相の学術会議の会員任命拒否の報道を聞いて、政治権力が国民の心の中に手を突っ込んだような危惧を感じた。思想、信教、学問の自由は、歴史の中で多くの人々が血を流し、獲得してきたものであるが、その血を無にするような暴挙に、時代に逆行するかのような恐怖を感じる。国民は目覚めて「否」を言う時である。

教会の宣教も市民運動も、コロナ禍のために、自粛を強いられている。根岸線沿線9条の会が企画した池内了氏を招いての講演会も、開催できるかどうか決めかねている。このような重い世相に、聖書は時代を超えて、キリストにおいて「然り」を告げている。社会も私たちの回りも行き詰まっているようだが、神は「是認」を宣言してくださっている。

「光は闇の中で輝いている。闇は光に勝たなかった(ヨハネ福音書 1:5)」という御言葉が希望であり、救いである。ところが、闇を作ったのは他人ではなく、自分たち自身である。民主主義は自分たちで作り上げる制度であるからだ。これを認識せず、他を批判するだけでは、責任放棄になる。このしんどい制度の中を、私たちは生きている。

私の「悪性リンパ腫」は、治療が終わって2年が経つ。医者は、3年間、再発がなければ、完治となると言ってくれている。定期検診は受け続けなければならない。抗がん剤の後遺症か高齢化の所為か、歩くことが思うようにならない。毎日、公園の花木を楽しみながら、老人の足取りながら、4~5千歩くらい歩いている。私と同じような高齢者たちが歩いていて、仲間として親しく挨拶を交わし合う。これも楽しみである。

春を待っている。団地に植えられた草木も春に備えているようだ。季節通りにやって来る春だけでなく、世の中も、明るい春の到来を待っている。